

TAMA CINEMA 通信



TAMA CINEMA FORUM

TAMA映画フォーラム実行委員会 〒206-0025 多摩市永山1-5 ベルブ永山(永山公民館内)
代表:042-337-6661 直通:080-5450-7204 <http://www.tamaeiga.org/>

特別上映会 4/4  ベルブホール (ベルブ永山 5F 京王永山駅・小田急永山駅下車徒歩約2分)

Sasaki Shoichiro
ミンヨン 倍音の法則
Harmonics Minyoung



上映企画者の言葉

2001年、私が映画祭実行委員になった年に初めての上映企画「RESPECT 佐々木昭一郎」を実施しました。本企画は司会に是枝裕和監督を迎えて大変好評を博し、翌年は塚本晋也監督を迎えて第2弾の上映も行ないました。その後も佐々木さんとの交流は続き、ミンヨンと佐々木さんが出会った早稲田の上映会にもお邪魔していました。日本の学生たちと比べて彼女は自分の意志をしっかりと持ち、それを伝える力を持っていたと記憶しています。

2014年、待望の新作『ミンヨン 倍音の法則』を観たとき、ついにこの日が来たことに信じられない思いでした。観たこともないタイプの映画であり、映画監督佐々木昭一郎の誕生を実感しました。過去の作品たちが伝説となった今、長いトンネルを抜けて青空のように晴れやかな作品が誕生したことを喜ばしく思います。

佐々木監督の新作を上映するまでは実行委員を辞められない、と思っていたので、次の目標のためにまた作品を創ってくださることを期待しています。(黒川)

【トークゲスト】佐々木昭一郎 監督 & ペトル・ホリー 氏

ペトル・ホリー氏 プロフィール (チェコ蔵主宰 <http://chekogura.com>)

ブラハ郊外のドブジーシュ生まれ。1990年ブラハ・カレル大学哲学部日本学科入学、早稲田大学大学院文学研究科にて歌舞伎を研究、06年同大学大学院博士課程を卒業。06年から13年チェコセンター東京初代所長を務め、ヤン・シュヴァンクマイエル、ヴィエラ・ヒチロヴァー、イジー・トルンカ監督の映画字幕作成や書籍翻訳、関連書籍の執筆などの実績を積み、現在、埼玉大学兼任講師。また未だ知られざるチェコ文化・芸術の紹介と普及を目的にした「チェコ蔵」を主宰し、チェコ文化を広く日本に紹介している。『ミンヨン 倍音の法則』では神父役で出演。



佐々木昭一郎 監督からのメッセージ

映画はお金だ。しかし、お金がないことを軸に、映画創りに飛び発った。すると、倍音(harmonics)に共鳴する人たちに次々と出会うこととなり、その結果、映画はお金ではないとする映画『ミンヨン 倍音の法則』が完成した。

テレビでは観客(視聴者)の顔は見えない。しかし幸いにも、度重なる拙作の上映会が、各地で開催されてきたおかげで、よく見えるし観客に触れる。なかでも、2001年『多摩映画祭』は忘れられない。是枝監督が司者会で中尾幸世さんがゲスト。黒川由美子さんがその上映会を演出し盛り上げた。誰にもいわなかったが、そのとき私は映画を創る決心をした。司会者の是枝監督は、ひとにはないものを全てもっている。

同じように私はほかのひとにない全てを持っている。つまり技量(個性)だ。私の特徴を更に変革し変調し展開させて、『ミンヨン倍音の法則』を創ったのだ。(注:詳しくは『ミンヨン倍音の法則シナリオ+ドキュメント(映人社)』をご高覧ください。)

さて、次回作は『FIGARO』だ!ミンヨンがワンシーンだけ歌う。そのシーン以外は今から、徹底的に脳みそを使い、考える。スタッフもキャストも、私から演技指導も技法の注文も期待してない。ひたすら考えるのだ。BEAT YOUR BRAIN!(頭を使い切れ!)

佐々木昭一郎(ささき・しょういちろう) 監督 プロフィール

1936年、東京生まれ。立教大学経済学部卒。60年、NHKに入り、ラジオ文芸部に所属。63年、「都会の二つの顔」を福田善之、林光と共作。66年、テレビドラマ部に移り、「マザー」「さすらい」「夢の島少女」「四季・ユートピアノ」「川の流れるはバイオリンの音」などのドラマを演出。プロの俳優ではない出演者を起用した独特の作風が国内外で高い評価を受け、世界最高峰の国際番組コンクールであるイタリア賞など数々の賞を受賞している。95年にNHK退局後、05年まで文教大学で教授を務めた。現在、フリーディレクター。

特別上映会特設ページ

www.tamaeiga.org/special/minyoung

佐々木昭一郎監督と本作について、助監督を務めた黒川幸則さんにお訊きしました。(取材者：実行委員 佐藤)

—— 助監督をやっていたいかがでしたか？

黒川 助監督のお話を頂いたとき、正直ちよつと迷いました。僕は十代の頃から、佐々木作品のファンだったんですが、自分が心酔してきた作家に近づくのは危険だなって。仕事として付き合おうと、幻滅したり、軋轢もあつたりするし。それで最初のうちは、実際そうやって、辛かった(笑)。それに佐々木さんの創作は、通常の映画作りとは違うので、非常に戸惑いました。

—— 具体的に何が戸惑ったのか？

黒川 映画の現場って、罵声が飛び交う世界でしょ。大勢のスタッフで役者を囲んで、ヨイスター！カッチン！って、カチンコ叩いて。佐々木さんはそういうのをまじく嫌う。そうすることで生身の出演者が役になつてしまふ、偽の何かになつてしまふ。だからカチンコは無し、号令もかけない。出演者の傍には撮影部と録音部のみで、(カメラマンの)吉田さんが「はいどうぞ」って言って、いつの間にか始まつて終わつてる。監督も遠くから見てたり、場合によっては姿を消したりしてる。

—— 監督がいないんですか？

黒川 佐々木さんの場合、出演者の傍で芝居を演出するのではなくて、現場の雰囲気演出する、と言えればいいでしょうか。私見ですが、その中で、作品に必要なものを少しずつ見つけていく。無論、現場以外で、ミンヨンさんとは入念にディスカッションされてましたが、僕はそこには立ち会っていません。僕はあくまで現場の助監督で、こうして話しますが、作品のほんの一部に関わっただけという感覚なんですよ。

—— ドキュメンタリーみたいな現場なんですか？

黒川 ではないです。出演者には佐々木さんが考えてきた台詞が与えられている。それも大体、撮影当日の朝、僕が配る。それで例えばあの劇中のお爺さんたちに渡すんだけど、不思議なんだよね、みなさん、「ハイ分かりましたー」って言って、すごく気持ち良く、素直にそれを読んでくださって。普通、役者さんだったら、「そんなの聞



いてないよ、いきなりできません」ってなる。新鮮でしたね。最初はこんなので大丈夫？って思ったけど、最終的には、これでいいのだ！って思いました(笑)

—— シナリオが無いのでしょうか？

黒川 現場を管理するためのいわゆるシナリオは無いけど、佐々木さん独特のプロットがあつて、それは準備の初期からそんなに変わらない。イメージの骨子はしっかりとあつて、それを出演者の身体を使って、また音楽を使って、どう語っていくか。最終的には、編集で物語る。僕は、佐々木さんは映像詩人ではなくて、物語作家だと思っています。普段お喋りしていても、とても快活で、明朗で、冗談も多くて、名調子。それが作品にも出ている。

—— 映画のお話はされましたか？

黒川 色々聞かせて貰つて楽しかったです。佐々木さんは戦中育ちで、やはりその世代の方は、戦後入ってきたアメリカ映画を浴びるように見ている。ジョン・フォード監督の『わが谷は緑なりき』なんかは、本作にも通じるところがあると思います。

意外だったのは、佐々木さんがサミュエル・フラウ監督の話を嬉々としてされたことです。フラウって、バイオレンス作家で、映画は女と銃だつて人ですから、佐々木さんがなぜ？って思ったんだけど、よくよく考えるとすごく通じている。フラウは映画監督になる以前、新聞記者だったんです。まさに「ジャーナリスト魂」を持った社会派の監督なんですね。本作で描かれる佐々木さんのお父さんも、毎日新聞の記者で世代的にも近い。佐々木さんはフラウが記者だったとはご存知なかったみたいですが、直感的にシンパシーを感じていらしたのでは。

それで、今更気づいたのは、佐々木作品もまた暴力を描いてきた、ということですね。国家による暴力、男性の女性に対する、大人の子供に対する、暴力への怒り。これについては「映画芸術」の稲川方人さんによる佐々木監督インタビューが、面白くて的確なので、ぜひ読んでみてください。なぜ「箱根八里」か？の秘密も明かされる(笑)

——「ジャーナリスト魂」は、本作の重要なテーマですね。

黒川 それに関連して疑問だったのは、ちよつとネタバレしちゃいますが、早稲田大学のシーンで「魂はここに置いていく」という台詞です。大切な「ジャーナリスト魂」を、なぜ置いていくなんて言うんだらう、と。気になって、佐々木さんに「魂は大学に残して、私は行動の人になる、という意味ですか？」と伺ったら、「それはそうだけど、批判でもあるんだよ」と仰ってて、なるほど！と思いました。単なるジャーナリスト礼賛ではなく、「魂、置いてっちゃうんだ」っていう批判ともとれて、観た人が考えるようになってる。

——両義的なんですね。

黒川 両義的というか、曖昧。そう考えると、この作品全体が曖昧にできてるなと思います。例えば、汽車の中で、ミンヨンは、殺された夫に対して怒りをぶちまける。涙なしには見られないシーンですが、なぜ軍部にだけでなく、殺された夫に、ここまで激しく怒るのか。そのあとなぜあんなに明るく葬送するか。なぜ日本人の母を韓国人の女性が演じ「アリラン」を歌うのか。なぜ原爆の空があんなに美しい、なんて言うのか。なぜ…と、疑問は尽きませんが、そこで思考停止しないで、観客それぞれが参加して考える広がり、この作品にはあると思うんです。

——佐々木監督とは現場以外でのお付き合いもありましたか？

黒川 よく食べ物屋さん連れて行って貰いました。天ぷらの「いもや」とか、新宿のステーキスタンドとか、映画にも出てくる渋谷の力

レー屋さん（「いんでいら」）とか、いわゆるB級グルメのお店。僕も結構好きだし、喜んで頂きました（笑）「キッチン南海」のカツレツがお好きなんですね、という。劇中でも天井が美味しそうでしょ。そういう男の子っぽい感じはありますね。それで、すぐお店の人と仲良くなっちゃう。

——最後に一言お願いしまあ。

黒川 洋装したミンヨンさんが「コンサートに行ってきます」っていう、何でも無い短いシーン、明るい笑顔、あの辺りから僕はもう涙が止まらなくなるんですね。今の日本にも通じる、芸術を喜ぶということすらだんだん息苦しくなってくるような時代閉塞の状況でも、あのお母さんの明るい笑顔、あれはきっと佐々木さんの鮮烈な記憶の断片だと思えます。もんぺ履いてるシーンはひとつもありませんね。おしゃべりして、徹底して闘って、哀しくても明るくモーツァルト歌いながら、疎開して行くんです。

伝説の映像作家が撮った難解な芸術映画だなんて思われがちですが、もうそろそろ佐々木監督を伝説に封じ込めるのはやめて頂きたい。粉々になった記憶の破片を拾い集めて詰め込んだ、透明で瑞々しい、新人インディペンデント監督のエンターテインメント映画なんですよ！これって。



写真：本作出演シーンより

黒川幸則氏 プロフィール

多摩市在住。映画監督。子供の頃『四季・ユートピアノ』を観て以来、佐々木作品のファンに。それから30年後、『ミンヨン 倍音の法則』の助監督につく。

～ 映画祭という聖地へ、映画と人との出会いを求めさまよう ～

映画祭実行委員が各地の映画祭を訪れてレポートするコーナーです。

vol.1 第7回ちば映画祭篇

注目の新鋭監督の作品をそろえた第7回ちば映画祭が3/13から3日間、千葉市の千葉市民会館にて開催。

今回TAMA映画祭スタッフ（有志）で、3/14の二宮健監督の特集上映におじゃましました。上映されたのは、昨年のTAMA映画祭の同監督特集でも上映した『眠れる美女の限界』『SLUM-POLICE』を含む4作品。上映終了後は、観客・スタッフが赤いサイリウムを振りまくるといふ映画祭の会場とは思えない空間の中で監督と出演者の方々が登場し、二宮監督の魅力が熱く語られました。

かわるがわる登場するゆるキャラや、手作りのオリジナルグッズとTシャツの販売、謎の映画グッズご自由にお持ちくださいコーナーなど、おどろきの演出で楽しませてくれたちば映画祭。中でも強烈だったのは、ロビーや会場内でリピートされていたテーマソング。「ちよいとアンダーグラウンドだけ映画が何よりも好き 地味目な地方都市だって最高にポップなのさ」という歌い出しから始まり、「キャピタリズムをぶっとばす上映が始まる」と続き、最後は、映画祭のテーマである「初期衝動 忘れない」という歌詞で締めくくられ、映画祭に対する強い思いが感じられるテーマソングとなっていました。若手監督作品のエッジの効いたプログラムと、愛情のこもりすぎた演出で観客を楽しませてくれるちば映画祭は、間違いなく今最もクールでポップでアツい映画祭でした。（尾川）

写真：謎のゆるキャラ



3月6日～15日に開催された第10回大阪アジア映画祭に行ってきました。昔からアジア映画（特に台湾映画！）が好きだったので、以前からとても気になる映画祭でした。

大阪到着の初日は、川沿いのウッドデッキがモダンなABCホール。上映作品は『コードネームは孫中山』です。前作『藍色夏恋』から12年ぶりの待望の新作です。早めに会場に到着すると、会場の入り口でイー・ツーイエン監督と主演のジャン・ファイユン（詹懷雲）さん、ウェイ・ハンディン（魏漢鼎）さんの会場入りに遭遇。上映後のトークでは、能弁な監督に比べ、緊張のためか主演の二人はなかなか話すことができずにいて、微笑ましかったです。その後、急遽サイン会が開かれ、予想を上回る長蛇の列に、この映画の人気ぶりを垣間見ました。（本作は最優秀作品賞と観客賞のW受賞。）

そして2日目は九条にある小さな映画館シネ・ヌーヴォ。下町情緒が色濃く残る街の映画館です。館内の壁中には、ここを訪れた関係者のサインがびっしりと書き込まれ、歴史の重みを感じました。ここでは、台湾ニューシネマのドキュメンタリー映画『光と影の物語：台湾新電影』を観賞。世界中の映画人の貴重なインタビューが聞ける素晴らしい作品でした。

ということで、2日間でしたが、今回の大阪遠征は、良い思い出になりました。又、来年もこの映画祭に参加したいと思いました。（加藤彰）



写真：映画祭パンフレット



次回特別上映会は

白夜のタンゴ



次回特別上映会は、各国映画祭で喝采を浴びた、タンゴと人への愛に満ち溢れた音楽ドキュメンタリー『白夜のタンゴ』を上映予定です。詳細はホームページ www.tamaeiga.org、チラシなどをご覧ください。

TAMA NEW WAVE

ニュース

昨年のTAMA NEW WAVEコンペティションノミネート作品『ひとまずすすめ』（柴田啓佑監督）が6/6（土）～テアトル新宿にて1週間限定でレイトショー上映決定！地方都市に住むアラサー独身女性が、いまの生活から抜け出したいと思いつつ悩む姿をやさしくユーモラスに描いた快作です。

映画祭新実行委員募集！

TAMA映画フォーラム実行委員会は、2015年11月21日（土）～11月29日（日）に開催予定の第25回映画祭TAMA CINEMA FORUMと一緒に作る実行委員を募集しています！

上映プログラムを企画したい、イベント運営に興味がある、広報・宣伝をやりたい...など、映画祭づくりの現場には、あなたの希望に沿って力を発揮できる領域がたくさんあります。また、映画好きやイベント好き、地域の方々など、市民が作る映画祭だからこその出会いがあなたを待っています。

この度5月17日（日）に説明会を開催いたしますので、興味のある方はお申込のうえ、ぜひご参加ください。また、日程の合わない方は個別に説明いたしますので、お気軽にご相談ください。

詳細はホームページ www.tamaeiga.org をご覧ください。

支援会員制度のお願い

当映画祭と一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「見る人、見せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願い致します。

[支援金寄付 個人会員] 一口1000円

郵便振替番号 00160-5-541123

加入者名 TAMA映画フォーラム実行委員会

（ご不明な点はお問い合わせください）

特典①：映画祭チラシ送付

特典②：映画祭パンフレット贈呈

特典③：特別上映会割引（当日料金が半額！

2～8月の間に4～5回開催予定）

※その他特典もご用意する予定です。

TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ www.tamaeiga.org

[@tamaeiga](https://twitter.com/tamaeiga) (最新情報をフォロー) www.facebook.com/tamaeiga (facebookページに「いいね！」で参加)